李昂『夫殺し』から陳思宏『亡霊の地』へ
—台湾郷土文学におけるフェミニズムと LGBTQ 文学の連帯—

赤松美和子
（大妻女子大学教授）

1983 年に発表された李昂著『夫殺し』は、聯合報中編小説賞を受賞し、その後、フェミニズム文学として、日、英、仏、独、韓などで翻訳出版された。約 40 年後の 2019 年に陳思宏著『亡霊の地』が刊行され、金鼎賞を受賞、日、英、仏、韓、タイなどで翻訳出版されている。多くの国で読まれるこれら二つの台湾郷土文学は、鹿港と永靖という彰化県の地方都市の閉鎖的で濃密な人間関係の中で、現世、幽世の境界を越えて語られる保守的な価値観に抑圧され犠牲となる人々の救いのない物語だ。

『夫殺し』は、豚の屠畜を生業とする陳江水を殺害した妻の林市が、淫婦として市中引き回しの上、監獄に送致されたという新聞記事から始まる。『亡霊の地』は、作家となった陳天宏が、故郷でゲイとして生きることに耐え切れずベルリンに向かうものの、恋人を殺害し、ベルリンの刑務所での刑期を終え、十数年ぶりに永靖に戻ってくる場面から語り始める。

二作品にはともに母が登場する。『夫殺し』の林市の母は、飢えのため行きずりの兵士に二個のおにぎりと引き換えに身を任せて淫婦とされ一族の恥として川に沈められたという。『亡霊の地』の陳天宏の母は、陳家の長男に嫁ぎ、五人の娘を産むも、男児が誕生するまで姑に虐め抜かれた。

台湾では 2019 年に同性婚が法制化された。同性婚法制化にあたっては、LGBTQ 団体のみならず、『夫殺し』刊行前年の 1982 年に創設された婦女新知など女性団体も中心的な役割を果たした。一方、台湾の LGBTQ 文学のうち、レズビアン文学は経済的自立などフェミニズムを描いているものもあるが、『亡霊の地』のようにゲイ文学がフェミニズムを描いた例は希少であろう。

本報告では、『夫殺し』と『亡霊の地』を比較しながら、郷土文学におけるフェミニズムの描き方を分析するとともに、ゲイ文学がなぜ、どのようにフェミニズムを描き、連帯していくのか、その手法と意義を考察する。